

「日本情報科教育学会設立—位置づけと全国大会のご案内」

日本情報科教育学会会長 岡本 敏雄

1. 本学会設立の目的と意義 “情報教育”

高校において、普通教科「情報」、専門教科「情報」が設置された。そこで21世紀を担う新しい能力を持った若者を育てていくという営みは極めて重要である。いわば国家的事業であり、その営みに関わる方々の責務は極めて重く、かつ重要である。明治維新以来、様々な教育改革があったが、伝統的な基礎学力として社会的に認知されている読み、書き、計算という学力に加えて、既に訪れている（高度）情報化社会、さらに知識社会、かつ知恵社会の進展において、間違いなく“情報力”の能力形成は必須である。また様々な分野での学術活動、政治経済活動、社会文化活動においてもその能力形成の必要性、重要性は高まっている。さらに社会自体が“情報”に関連した文化の醸成を必要としている。

このような世界社会の変化に伴って、新しい教科「情報」というものを学術的（科学技術のみならず、社会・文化・哲学的にも）に深く、広く、そして長く論究・評価していくための学会として“日本情報科教育学会”を設立した。本学会は、高校普通教科「情報」にのみ焦点を当てているものではない。初等中等教育、さらには大学教育、社会教育といった連続した教育体系をも視野に入れ、教科としての「情報」と、一般の「情報教育」の概念相違を十分に精査し、かつ発達段階や学問の相違をも十分に検討しながら、新しい情報科教育学を体系、構築していくことを目的としている。

2. 新たな認識（新たな能力形成を目指して）

ところで、多分、科学技術教育が大切だと世界

が認識し始めたのは、ソ連のスパートニクが打ち上げられたことがきっかけではないかと思う。当時、米国は科学技術分野において完全にソ連との間で差がついていたと指摘された。その差をどう埋めたらよいかと、結局、教育に力を注ぎ始めたわけである。米国は日本の真似をしようと、追いつき追い越せでやってきた。実は、日本も戦後の復興は科学技術立国しかない、科学技術教育に力を入れてきたので、日本の大学の理工系の定員も倍増した。それで日本も高度成長ができ、成果を出すことができたわけである。そこまでは良かったのであるが、そこで弛んでしまったように思える。日本が極めて早いスピードで成長している時期に、次の教育コンセプト、確かな人材育成の目標を持つべきであったと感じる。その頃に情報が大切だという認識を持てれば良かったのであるが、それができずに世界の体制からみて、やや出遅れた感じがする。

本学会は、情報の科学技術的な教育内容だけではなく、社会的、人間的さらには、“情報と文化”の創成といった視点からも学術的に探究していくことを目的としている。

また、本学会は、高校普通教科「情報」を中心に、中等教育と高等教育の接続性も踏まえた情報教育分野を研究対象とした学会である。国策としても極めて重要な分野であり、また人材育成、情報に関わる文化の創造といったミッションもある。

インターネット技術の発展に伴って、いわゆる情報化社会から知識社会への変化は、目覚ましいものがある。そこでは、常に新しい知識が生まれ、その流通は急速である。教科書的な知識は重要であるけれども、それをどう活用し、問題解決を図

るかという実際的能力（コンピテンシー）もより重要になってきている。

教育の基本的考え方として、特にカリキュラム論から見たとき、ラテン語の“Tabula Rasa”，つまり人間がこの世に真っ白な状態で誕生し、知恵をつけていく過程において、何を教えるべきかという議論で、基本的には形式陶冶と実質陶冶論というのがある。俗にいう読み、書き、そろばん（3Rs）論は両者を旨く反映した教科論である。中世、近代ヨーロッパ社会においては、エリート層はラテン語、ギリシャ語、論理学を中心に学んだという。これは、形式陶冶論に依拠した考え方である。一方、実学を重視した実質陶冶論の立場では、元来、工学、医学はその最たるものと思われるが、その精神の持ち主はレオナルド・ダ・ヴィンチであるといわれている。

少子化、グローバル化、語学的（英語）ハンディキャップ、アジア各国の追い上げなど内部・外部環境は極めて厳しい状況にあるけれども、教育制度のあり方も変革の時期にきているのかもしれない。情報化は目に見えにくい知恵の生産技術であり、気がついた頃には、後進国に成っていたということのないよう、国家レベルにおいても、骨太の国家戦略が求められる。高等教育のレベルにおいても、骨太と多様性（柔軟性）を持ったシステムが求められている。

本学会は、高校普通教科「情報」をコアにししながら、情報の科学・技術的事項、その発展に伴って社会の構造の変化とその特質、さらに人間との関係などを体系的に“学”として探究していく教育系の学会である。ここで、再度理解して頂きたいことは、「情報」は、数学、理科、国語、社会といった既存の教科との関連性（学力・能力形成、内容面で）はあるものの、極めて独自の能力観、内容を有する独立性の高い教科であり、21世紀において多くの国々がその教育体制を整えてきているということである。

今後、既存の教科の学力と新教科「情報」の学力との比較研究も重要となる（「教科」情報の目標論、内容＜カリキュラム＞論、評価論、指導論、

教員養成・研修論等との視点から）。また教材研究は、教科研究の中心的テーマでもある。さらに比較教育・制度・文化論も本教科を大局的視点で位置づけるためには、重要な学会の研究テーマとなろう。

3. 経緯と趣旨の確認

高等学校の教科「情報」は必修として新設され、2003年度より年次進行で実施されている。その後、各地で情報科教育に関する研究会が多数発足し、学校現場では担当教員によりさまざまな工夫を施した授業が行われている。また、2005年8月には、情報科教育に係る中央教育審議会・専門部会が設置され、教育課程の改訂に向けて審議が行われ2年が経過した。教科「情報」の教育に関心のあるものとして、多くの先見性のある研究者、教育者、企業人、一般社会人らが、「情報」の教科教育を専門とする学会の必要性を痛感してこられた。そこで、情報科教育の発展のために日本情報科教育学会の設立がなされた。

新たに教育課程が編成される際には、長期にわたる継続した教育研究が必要である。しかし、情報教育に係る種々の担当者が短期で交代することになったり、また、研究者や教員においても研究テーマや担当教科の変更等を余儀なくされたりして、教育研究を継続して行なうことが困難な場合が多々ある。このような状況にあっても、情報教育について長期にわたり継続した研究を維持するためには、その教科に係る諸課題を直接に研究のテーマとする組織が必要になる。このような状況を共通に認識し、情報科教育研究を継続的に進めるため、関心をもつ多くの関係者に広く呼びかけ、研究の推進を支援し、その研究成果を交流する場を提供する。そして、それとともに、それらを社会に還元できる組織として、日本情報科教育学会の設立がなされたのである。周知のように情報教育に関係する学会はいくつもあるが、教科を中心に置き、その教育学的・哲学的な研究はもちろんのこと、教科の在り方について、時代精神、場所精神、すなわち社会・文化の進展・変化に対

しても、恒常的・組織的に研究を進めている学会が国家的に重要であるという認識である。このことは、教育現場や教育行政のみならず、国内外の社会においても極めて重要な問題である。教育系の学会は、必ずしも規模の大きさではなく、例えば、半世紀にもわたる長い期間において、個人研究はもちろんのこと、組織的・恒常的にも研究を

行い、将来においても持続することが、各方面から信頼される最大の要因となる。

以上のように、情報科教育研究においては、優れた研究者・実践者の養成に加え、それを支える組織が必要であるという状況をご理解いただき、本学会の設立に向けてご協力・ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

日本情報科教育学会第1回全国大会ご案内

(詳細はWeb-Pageを参照 <http://jaeis.org/zenkoku/>)

日時：2008年6月28日(土)、29日(日)

場所：滋賀大学・大津キャンパス(教育学部)

〒520-0862 滋賀県大津市平津2-5-1

プログラム(第1報)

第1日目：6月28日(土)

1. 08:50-09:20 受付
2. 09:30-12:00 研究発表
3. 13:10-13:50 総会
4. 14:00-14:30 基調講演 岡本 敏雄(本学会会長, 電気通信大学大学院教授)
5. 14:40-15:30 招待講演 安藤 慶明(文部科学省 初等中等教育局 参事官)
6. 15:40-17:00 パネルディスカッション1 「情報科教育の新しい展開」
・話題提供 永井 克昇(文部科学省 初等中等教育局 視学官)
7. 18:00-20:00 懇親会

第2日目：6月29日(日)

1. 08:50-09:20 受付
2. 09:30-12:00 研究発表/ワークショップ
3. 13:00-14:20 招待講演 未定
4. 14:30-16:30 パネルディスカッション2 「情報のモラルと安全」
5. 16:30 閉会